

第Ⅲ部

法政大学教職課程センター シンポジウムの報告

法政大学教職課程センター シンポジウム
教職課程の学びを考える

日 時：2016年2月24日（水） 16：00～18：30（開場 15：30）
会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 外濠校舎 S407 教室

＜プログラム＞

〈講演 1〉 学校教育の課題に応える学生の学び

尾木 直樹（法政大学教職課程センター長）

〈報告 1〉 『特別支援教育の現場と教育学の探求』

高村 匠

〈報告 2〉 『学校現場でのボランティア参加と歴史学の探求』

加藤 周人

〈報告 3〉 『教職を目指す学習と教職課程センターへの参加』

梅澤 英里

〈報告 4〉 『教職の現場から大学時代の学びを振り返る』

久保田 志ほり

〈討 論〉

〈講演 2〉 『総合大学の強みとは～教育問題の実態を踏まえて～』

尾木 直樹（法政大学教職課程センター長）

〈まとめ〉 『教育的真理探究のための学びと共同へ向かうために』

佐貫 浩（法政大学教職課程センター副センター長・
キャリアデザイン学部教授）

司 会：遠藤 野ゆり（法政大学キャリアデザイン学部准教授）

〈講演 1〉

『学校教育の課題に応える学生の学び』

法政大学教職課程センター長 尾木 直樹

司会（遠藤） 皆様、本日はお忙しい中、法政大学教職課程センターシンポジウム「教職課程の学びを考える」にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

私は本学の教職課程担当教員で、教育実習事前指導や教育原理等を担当しております、キャリアデザイン学部の遠藤野ゆりと申します。

それではシンポジウムを開始いたします。まず、講演に入らせていただきます。法政大学教職課程センター長の尾木直樹より、「学校教育の課題に応える学生の学び」について、お話しいただきます。

尾木 どうも皆さん、こんにちは。寒いところご苦労様です。今日はわずか 20 分で話をしなければいなくて、テーマからすると 2 時間はほしいところですが、でもその要求に応えるのがプロだと思いますので、頑張ろうと思います。

「学校教育の課題に応える学生の学び」とは何か。これは本当に非常に印象的な、重要なテーマだと思います。今日求められる教師像というのですが、例えば今日の新聞を開くと何が載っているかといいますと、兵庫県である公立中学校の部活の中でいじめがあって、同じ部活の子に殴られ蹴られて胸を骨折したわけですね。それで担ぎ込まれて救急車に運ばれたときに教師が、「階段から落ちたと言え」という指示を出したと。本人がそういうことを言ったのかどうかは分かりませんが、そのことが分かってきて、校長先生は加害生徒の側にペナルティとして部活の大会の参加を差し控えさせる出場停止処分を下しました。ところがその教師はその校長の指示を無視して、大会に参加させてしまったんです。加害生徒は強い子だったんですね。そしてなんと優勝してしまったという、あり得ないようなことが起きて、今日はまたずいぶん騒がれてニュースでも流れています。

そうかと思ったら、2、3 日前には九州地方のベテラン女性教師が殺人未遂罪で警察に逮捕されるということが起きましたよね。

こういうことが報道されるたびに、例えば兵庫県の事件では、いじめを隠ぺいするだけではなくて、隠ぺいに生徒まで巻き込んでいるのか、校長の指示も聞かない教師がいるのかというのがわっと広がるわけです。今の学校の先生はどうなっているのかと。

今はネット社会ですから、教師や学校に対する眼差

しは非常に厳しいです。

こういう時代にあって、これから教師になろうと教職課程を取る学生はどういうふうに学ばいいのかというのは、すごく大事なことです。現場に入って隠ぺいに巻き込まれてしまったとか、もの言わぬ教師になってしまっただけではいけません。少なくとも法政の卒業生としてはあり得ないと思っています。

では今日の学校教育の課題は何だろうということで、レジュメの方にまとめました。

最初に、安全や安心、命をなかなか尊重できない学校現場の諸現象が蔓延し、そのことによって社会的な不信感がものすごく巨大になってしまったということですね。

去年だけでも新規の不登校者が 6 万人増えているという問題。それからここ 2、3 日話題になっていますし文科省もこの 2 月中に一つの指針、ガイドラインを出す予定ですが、組体操の問題でもそのことが非常にはっきりしているわけですね。組体操、僕も子どもの頃やっていました。僕は中学 2 年生のときにタワーの一番上に乗せられて落ちた人間なんです。その時の恐怖を、落ちていくときの風景を未だに覚えています。組体操では、この 4 年間で 8500 人ぐらい病院に担ぎ込まれる怪我が続発しているわけですね。それでもまだ学校現場ではやり続けていて、文科省がガイドラインを出さないと止められないという事態。

これはもちろん学校の先生だけの問題ではまったくなくて、保護者もそれを望むからやらざるを得ないところもあるわけですが、子どもの命を守れないような大人とか社会になってきている問題というのは、実に深刻だと思います。

2 番目に学力の面ですが、2000 年に入るまでは、学力はもちろん大事だけれども、どんなふうにして人格を形成するのか、というのが学校教育の最大の目的になっていたはずなんです。

ところが、2000 年に入ってから学力、学力とあまりにも言われるので、僕も自分の研究所で全国調査をやってみたんですね。いったい親の願いはどこにあるんだろうと。僕は全国へ講演に行くのですが、親御さんたちは学校に対して 2000 年の半ばまでは、やっぱり人格の形成を求めていたんです。これはデータで示す必要があるなということでデータを取ったら、親は圧倒的に人格の完成、人間形成ということを学校に求めていました。もちろん家庭教育の課題でもありますけれど

ども、そんなことが調査で明らかになったわけですね。

ところが同じアンケートを先生方にとると、圧倒的に学力形成になってしまいうんですよ。完全にねじれてしまった。学校現場のほうは、教育委員会や文科省からあまりにも学力、学力と言われていたから、それが保護者の要求でもあると錯覚を起こしていたのではないかと思うんです。そういうねじれがあるという問題提起を僕がしたのが、2002年か2003年ぐらいのことです。

それが今、すっかり保護者までもが学力、学力になってしまって、本当に日本列島が学力汚染社会みたい。学力の定義も完全に国際社会的に見ると孤立した、古い形の学力論がまだ保護者の間でも蔓延していますし、学校現場もまだまだ古いということですよ。学習指導要領が2020年に全面的に変わってきますけれども、学力偏重で人格の完成というところがスポッと抜けている。これでいいのかと思いますし、問題は深刻になっていると思います。

3番目は、子どもと心のキャッチボールができない先生の問題。これは教師を責めるというよりも、労働強化の問題。3年前に教員の労働時間の国際比較調査が出ましたが、日本の教員は国際社会、OECD平均のなんと1.4倍も勤務時間が長いことが分かりました。それからこの間連合総研が出した調査でも、小中教員の労働時間が非常に長いことが分かりました。

ただ、こういう状況は僕が現職の教員をやっていた21年前も同じだったんですよ。そこにメスが入っていないことにジリジリしていたのですが、ついに数日前から先生方の中に動きが出てきて、ネットを使って署名活動が始まりましたね。中学の部活を何とかしてくれと文科省に対して要求を出す。今これを行っている人たちは、そんなに人数は多くないと思うんです。十数人かそれぐらいの人数ですけども、署名が1万6000集まっているということでニュースにもなっています。これからテレビも次々取り上げる予定だそうですが、やっと先生方の声が社会に伝わるようになった。なかなか伝わらなかったんですよ。僕が内部にいたときは、こんなにみんなで話題にしているのに、なんで社会に伝わらないのだろうと思っていました。僕が外に出てみたら、こちらから聞き取りにいかない限り、本当に伝わってこないんです。何が原因なのかわかりませんが、それぐらい遮断されてしまっている。

子どもたちと心のキャッチボールができない先生が増えてきた背景には、多忙化が一つの大きな要因になっていると思います。

僕は先ほどまで、教員採用試験合格者の体験を聞く会に参加していたのですが、はっきり言って、みんな

すごくいい教師になりそうな学生ばかりですよ。これが現場に行くと、おかしくなっちゃう。あ、ごめんなさい。おかしくさせられそうになる。僕のゼミの卒業生で教員になった子も、「先生、苦しい」と言うんですよ。みな苦しんでいるんですよ。尾木ゼミでやったときと全然違うと。だから「焦らないで。みんな心で思っていることは同じだから」と励ましているんです。

これはいったい何なのか。せつかく法政でしっかり学んで、教師はこうあるべきだと思って教育現場に入って行ったら、全然違う世界。これはいかがなものかと思えますね。ただ、誰も辞めていないんですよ。粘り強いでしょ、法政の学生は。そう簡単には辞めない。

でも子どもと心のキャッチボールができないと、教師は務まらないと思います。どんなに教える技術がうまくても、塾の講師ではありませんから、このところが弱いと非常に厳しいなということですよ。

4番目ですが、人事考課制度のひずみが決定的になっていると感じます。各県です。実はマイクを通しては言いにくいのですが、人事考課をやっていると言いつつながらたいしてやっていない、中抜きをやっている県もあるんです。そういうところに行くと、先生方も元気なんです。どの県と言うとまずいから言いませんけれども、本当に見事に違いますよ。

だから上からの管理だけの人事考課というのは、絶対に僕、間違いだと思います。本当に言いたいぐらいですけども。みなさん実際現場に行ってみてください。先生方が生き生きされています。管理職の例えば教頭会に呼ばれて講演に行っても、教頭さんたちが現役の先生方以上に生き生きしているんですよ。ヨーロッパに視察へ行くと管理職の目が輝いていますけれども、同じなんです。輝いているんです。

公教育は自治体の経営だからもっているだけであって、一般企業だったら、今の教育界の人事考課制度では、ほとんどの会社はつぶれていると思います。それほど本当にずさんで、一方的で、問題が山積しています。

5番目に、まだまだ市民社会に開かれない閉鎖的な学校体質の問題。地域支援本部というのが今約4000近くに増えてきていますが、必ずしもうまくいっているという意味ではありません。地域も入って学校運営に参画していこうということで、うまくいっているところはうまくいっていますし、地域のボスの方の影響が大きいところもあって、全面的に評価するわけにはいきません。しかし、そういう動きが出ているのに、まだ4000を切っているぐらいの段階で、まだまだ先生たちだけで苦労している実態があるように思います。

ではこういう中で、学生の大学での学びをどう創造

していけばいいのか。項目だけ言いますと、一つは先ほどの教員採用試験の合格体験の話聞いていても、学習支援ボランティアとかいろいろありますけれども、学生時代にインターンシップやボランティアをやっていることは非常に重要です。学校の教師の仕事の大変さを含めて、自分の適性もチェックすることができますし、すごく手がかかる子でも成長していく姿を見て喜べるというか、教師ってやっぱりいいなと、よりいっそう教職への情熱がわいてくることもあるようです。

アシスタント的な立場でもいいと思うんです。学校現場に入っていくことは、ヨーロッパの教員養成に比べても圧倒的にわが国は少ないです。促成栽培みたいにして現場に放り出していますから、3年生ぐらいからやっていくことがすごく重要です。国立系の教員養成の大学では1年生からカリキュラムに入れてやっているところもずいぶん多いように思いますけれども、そういうことも重要なことだと思います。

それからもう一つは、「わかる力」をどうつけるのかということ。塾講師なんかやっていると、どうしても「できる力」のほうに目がいってしまうんですね。これを軌道修正してほしいと思います。

「わかる力」と「できる力」は全然違います。トレーニングをして何回もやれば、できるようになるんです。でも何にもわかっていないという事態が、今特に小学校の教育課程ではたくさん見られているように思います。僕は前に教職の科目で400人ぐらいの受講生に、小学校2年生に九九をちゃんと概念として正しく教えるにはどうすればよいか、例えば 2×3 はなぜ6になるのかを説明しなさいという試験問題を出したの。見事に1人も正解がいなかったですよ。

その間違いは共通して、8割ぐらいが皆、足し算の便法として説明するんですよ。足し算、 $2+2+2=6$ 。それを早く出すために、 2×3 が6と言うのがいてね。嘘ばかり言うなという感じですけども、皆さん、大丈夫ですか。目がだいたい泳いでいる人が多いので(笑)、ここではやめておきます。

足し算の便法ではないんですよ。足し算だったら、 $2+0$ は2です。でも掛け算では 2×0 は0になりますよね。なぜ違うのか、説明できなくなるんです。面白いですよ。1人も正解がいなかったの。採点してて、気持ちよかった。こういうところで快感を覚えるようになると、教師として墮落してきた証拠ですね(笑)。

だから本質をきちんと見抜く力とわかる力をどうつけていけばいいのかというのは、自分の学びを本当に大丈夫かと、もう一回振り返っていかなければいけないと思います。

「できる力」はトレーニングをやれば、誰でもそれなりにできるようになるんですよ。小学校4年生がも

う6年生のペーパー問題をやっているよというようなことを、よく聞くでしょう。「うちの子、算数がよくできる」と自慢している親御さんがいますが、嘘ですよ、全然。理科系の数学の先生に聞いてください。そうやってステップアップ方式でやってきた子は、数学科に入ってからまったく伸びなくて困ると、こぼしています。東京理科大学の教授に聞いてみてください。本当にそういう勘違いがものすごくあって、「できる」と「わかる」は違うということをきちっと修正していかなければなりません。法政大学ではそういう教え方はしていませんので、安心してくださいね。

それからレジュメの方に書きましたけれども、結局学生に何を学んでほしいかという、教育哲学なんです。教育と決めなくてもいいですけども、哲学はきちんと学んでほしい。あるいは倫理学でも、論理学でもいいです。基本的な考えていく構造をしっかりと確立してほしいということ。

それからもう一つは、科学を学んでほしいということ。実は2年前に文科省は、脳科学を教育に生かすプロジェクトチームというのを、脳科学者らを集めて立ち上げたんですよ。

実は脳科学の発展は、今すさまじいんですね。日本でいうと、1997年ぐらいから発展してきたと言われていています。1998年の、ニューロンは年を取れば駄目になるだけでなく無限に増えていくという、全部の新聞のトップを飾ったあの大発見以降、ものすごく加速するように脳科学が発展しています。茂木健一郎さんとか、「ホンマでっか!?TV」に出ている澤口俊之さんとか、中野信子さんとか、最近は脳科学者がいっぱいテレビに出ています。脳科学の知見をしっかりと教育にも生かして行ってほしいですね。

これはわが国は20年ぐらい遅れていると思います。それで教育改革が致命的に、おかしな縄張り争いとかごちゃごちゃの世界からまったく脱出できない事態を生んでいる。科学の光をピシッと当てるのが大事で、ようやく文科省は、12月からですから1年ぐらいですか、蓄積してきました。ここからしっかりと学んでほしい。

学生たちには脳科学だけでなく発達論もしっかり学んでほしいと思います。今僕には、2カ月半のお孫ちゃんがいるんですが、すさまじい勢いで毎日成長するんですよ。本当に驚きます。ようやくこのごろ、左手だけ口のところに持っていくようになったので、おしゃぶりするのかな、と思って見ていると、親指を曲げたままなので口に上手く入らないんです。親指を曲げたままじゃ口に入らない、というのがわからないのね。でも、そのうち親指を伸ばし始めるんですよ。刻一刻と変わったいきます。

それと同じように、思春期や青年期だって発達しているわけですよ。あるいは高齢者は高齢者で発達しています。そういう発達論もどっぴりともいいからしっかり学んでおくことが、すごく重要だと思いますね。

それから、もっと子どもと触れ合ってほしいということです。そのためにはアシスタントで学校現場に入るのもいいですし、地域の子ども会などでお手伝いするのもいい。NPOのいろいろな活動もあるでしょう。子どものいる現場に入ってほしい。それは塾でもいいんです。入ってみて子どもと触れ合ってみるということ、いっぱいやってほしいなと思います。

それから、情勢に鋭くなってほしい。皆さんもご存じだと思いますが、センター試験は2019年に廃止になりますよね。2020年からは大学入学希望者学力評価テスト（仮称）というのが始まるでしょう。そして今まであった「現代社会」が廃止されて、「公共」という科目になります。

それから18歳選挙権で、今年の夏の選挙から高校生が参加します。市民教育というのはいったい何なのかということですね。政府は主権者教育と呼んでいますが、それでも、「公共」との兼ね合いとか、そのへんをどうするのかは極めて難しい。「公共」の理念は何かとか基本的なところを押さえていなかったら、飲み込まれるだけなんです。

そこをつかんでいくときに、グローバルな視点で見てください。そうするとずっと見えてきます。フィンランドとかオランダとか、教育先進国に学んでいけば、ああ、政府もそれを取り入れようとしているというのが見えてきます。

小学校5年、6年で英語の教科化も始まります。昨日のニュース、聞きました？ 英語を週2コマ入れる時間がないから、文科省が事例を提示したんですが、お昼休みにやれ、夏休みにやれと言うんですよ。アホかと思いませんか？ 昼休みと夏休みに英語を集中してやったって、意味ないでしょうが。うわあ、これは失敗するわと思っています。文科省は一体何を考えているのか。皆さん、情けないと思いませんか？ 英語を昼休みにやれと言うんですよ。こんな国、ないです。聞いたこともない。

それから、学び合いや共同学習がすごく重要です。今法政大学の教職課程センターではサークルを作って教科ごとに勉強していますが、こういうのをやって学び合いをしていくことはすごく重要です。

それから最後、実践的授業論。よく指導案の書き方をしっかり身につけてきとくれと、特に法政にはクレームがつくんです。確かにあんまりやっていないかもしれない。指導案の書き方はしっかり身につけてほしいのですが、書き方のテクニックを覚えるのではなく

て、それを作りながら授業をイメージし、子どもと向き合って展開している予想をして、シミュレーションしていくことが大事なんです。

ある県では授業指導案のフォーマットや書き方が厳しく定められていて、型にはめるように厳しく指導されるんですけども、指導案の書き方がうまくなればいい、ということではまったくないと思います。実践的な授業も模擬授業もどンドンやって、身につけてほしいなと思います。

あとまだ言いたいことはあるんですけども時間が来てしまったようです。ありがとうございました。（拍手）

司会 続きまして、本学の学生並びに教員となられた卒業生より、報告を行います。

〈報告1〉

『特別支援教育の現場と教育学の探求』

高村 匠

では、「特別支援教育の現場と教育学の探求」というテーマで、お話しさせていただきます。キャリアデザイン学部3年の高村匠です。よろしくお願いします。（拍手）

まず、自分がどういうことをしている人間なのかという軽い自己紹介から始めたいと思います。僕はキャリアデザイン学部の3年で、学部では教育学を中心に学んでいます。教職課程では、中高の社会科の教員免許の取得を目指して勉強中です。そして今回中心に話させていただくことなのですが、東京都の公立中学の知的障害特別支援学級で週3回、介助員のアルバイトをしています。

今日、僕が話したいことですが、2点あります。一つ目は、介助員として特別支援の教育の現場から学んだことについて、二つ目が、そうした自分の経験から教職課程への提案です。

はじめに、介助員っていったい何だろうという話です。特別支援学級で生徒の学習補助や教員のサポートを行います。例えば読み書きが困難な生徒に対しては、黒板の読み上げや、わからない字があったときに教えてあげる。

ほかには、どうしても教員の方が生徒個人の対応というか、個人的な指導で教室を抜けなくてはいけない場合に、介助員が代わりに教室を見る。学級運営上で担任教師だけでは対処しきれない部分を、黒子的にサポートするなど、いろいろなことをするのが介助員の仕事です。

介助員になったきっかけも、軽くお話ししたいと思います。まず大学2年の春ごろ教職課程を履修する中で、

将来本当に自分は教員になりたいのかという悩みを持ち始めます。そうした中で、春ごろから夏ごろにかけて、とにかく現場を知りたいと思いました。教員がどんな仕事なのかを知らないと、教員になれないと思ったからです。なので実際に子どもとかかわりが持てるボランティアや、現場の先生方が参加する学習会や講演会に参加して、とにかく現場を知ろうという活動を始めました。

そうした活動を続けていく中で、大学2年の8月に支援学級に勤める教員の方と知り合い、介助員という仕事に誘われます。そして大学2年の9月ごろから介助員を始め、現在で約1年半になります。

僕の入った学級ですが、知的障害特別支援学級という場所です。発達障害や自閉症などいろいろな障害種を持つ子どもの学級で、生徒19人に対して担任の教員が4名、介助員が2~3名入るという形です。

現場で学んだことを4点、挙げさせていただきます。まず一つ目は、子どもと接すること、教育することの責任感を覚えます。アルバイトしながらお金をもらって子どもと接するということは、どういうことだろう。自分の小さな言動でも、よくも悪くも子どもたちに影響を与えてしまうという経験の中で、すごい責任感を感じました。

二つ目が、指導が長期的なものであることを知りました。教員が4人いるのですが、4名とも違った指導方法なり、違った考え方がある。だから指導の中で、これは矛盾しているのではないかということもあるのですが、それも含めて全体として学級として動いている、その場その場ではなく長期的に子どもたちの成長があることを知りました。

三つ目、大学の講義で習った論理への裏付けがされると同時に、講義に批判的になるということです。大学の講義で習ったことは現場で実際どう動いているのだろうと、現場を見ることによって理解がどんどん深まっていく。論理の裏付けができるのです。

と同時に、現場にいるとやはり現場感覚が身につけてきて、講義で言っていることは本当なのかという疑問を持ったたり、批判的に講義に対して考えるようになりました。

四つ目が、興味の幅が広がる。自分が持っている生徒たちの入学する前、卒業後はどうなのだろうという興味がどんどん広がる。それにつれて、僕は小学校でも似たような有償ボランティアという形で、半年間教室にいさせてもらったり、卒業後大人になった発達障害のある方々ともかかわるボランティアに参加するようになりました。

学んだ経験を踏まえて、最後に二つ、教職課程への提案をさせていただこうと思います。まず一つ目は、

直接子どもとかかわる機会を作ってほしいということです。法政大学には付属校が3校あるのだから、教職課程の連携ができるのではないかと思います。

それと、自分が現場に行こう、出たいと思ったきっかけは、本当に教員になりたいのかという悩みからでした。教職課程は全員が全員先生になりたいと思っている人たちではなく、就活との両立という環境が整備されていないとやりづらいのではないかと。それだと、4年次の教育実習で現場と触れ合うのでは遅すぎるのではないかと思います。

最後に、「教え方を教える授業を」ということです。専門課程と教職課程と二つある中で、一番のメリットは専門課程で得た学問知識を教育の場にどんどん生かしていくということだと思います。そうした指導法が残念ながら教職課程では教えられていないと、僕は思っています。だから教科教育法だけではなく、学部ごとの専門性に合わせた、その特徴を生かした指導法をこの教職課程で学べればと思います。以上で発表を終わります。ありがとうございました。(拍手)

司会 高村さん、ありがとうございました。続きまして、加藤周人さん、よろしくお願いします。

〈報告2〉

『学校現場でのボランティア参加と歴史学の探求』

加藤 周人

文学部史学科4年の加藤周人です。簡単ですが、少し感じたことをお話させていただきたいと思います。

私は今もそうなのですが3年のときから、アシスタントティーチャーを横浜市立のある中学校でさせてもらっています。今年はその学校の支援員として、あるハンディキャップを持った男の子を見るという形で、一緒に沖縄に修学旅行にも行かせていただきました。

現在私は毎週木曜日に学校に行っており、「木曜先生」と呼ばれながら、朝毎回生徒とあいさつをしたりしています。ただ週に1度しか行かないこともあり、必ずしも生徒のいろいろな様子や日々の成長をじかにいつも感じるわけではありません。

やはり1週間行かないと、全然学校の雰囲気が変わってたりします。ある日行ってみると、朝から先生方がざわざわしている。何だろうと思うと、どうやらあの子とあの子がちょっと喧嘩をしたらしいとか、金銭の問題があったらしい。じゃあ朝あの子にちょっと声をかけてみようかと。私が8時過ぎぐらいに行ったら朝の職員会議に参加すると、そんな話が盛り上がっているわけです。

そんな感じで共有されたことを先生方は常に意識されているのではないかと、朝の会やそのあとの学校の

生活の中での何気ない言葉がけで感じるときがあります。

子どもがへこんでいるときも、授業のときに声をかけて「どうなの?」とか「これ、わかる?」と言ったり、近くに寄り添う。ただそれが近すぎずに、相手から何かアクションが出てくるのを少し待つような感じで、非常にそういうところは丁寧であり、職員室にいると情報共有がものすごくされているのだなと実感いたします。

もう一つ驚いたのは、生徒が1年経つとすごく成長するんです。最初に行ったときには1年生のフロアを見ていたのですが、「うるせえよ」とか、ちょっと成長が早い女の子だと「ちょっと、近づかないでよ」と、あからさまに嫌われるようなときがあったんですね。

ところが2年目になって、僕はまた1年生の担当をお願いしますと言われたので1年生のところにいると、たまに2年生が上がってくる。そのときに「近寄ってこないでよ」と言った女の子が、「あ、加藤先生、ヤッホー、元気にしてるんだ」と声をかけてくれたりですね。

あとは、身長が小さくて、「ねえ、かわいいね」なんて言っていた男の子の体つきが変わって、1年後には自分よりも背が高くなって、部活動のバスケでも競り合うような、そういう成長が見えたりする。

これは大学だとなかなか見えないところですし、しかもリアルに自分が先生をやろうと思っている現場で感じられることが、ものすごく自分の中では勉強になったなというところなんです。

ただ一方で、先ほど尾木先生もおっしゃっていたように教員の多忙化もあって、自分もそれをものすごく実感しています。朝6時に来て夜6時に帰る人もいれば、朝6時に来て夜8時ぐらいまでいる先生もいる。それは教育実習でも感じるのですが、どこか自分の中で先生をやりたいというところに疑問がつく。自分はこういう生活はどうかとか、自分はこれを乗り切れるかなとか、すごく自分の中で教育に対する責任感も感じられるようなアシスタントティーチャーの経験をさせてもらっています。

大学での学びですが、私はここに書いてありますように、史学科で歴史を専攻しています。東洋史を専攻してしまっていて、卒業論文もちろん教育とはまったく関係ない、2000年前の住宅について書きました。そういう専門の学びが、教員の中でどう生かされるかということなんです。

自分は4年間歴史を学んできて、高校のときはずっと世界史を勉強していましたが、あの教科書で覚えて、『三国志演義』はいいかなと東洋史にアバウトながら入っていくと、ものすごくそこに高い壁があることを感じます。

『三国志演義』をとっても、ただ三国が争って赤眉の乱でどうかいうのではなくて、その背景にもものすごくいろいろな登場人物がいて、いろいろな隔りがある。世界を見ることのすごい難しさを知り、それによって、どれだけ今の世界を知ることができるのかというところも感じました。

例えば史学科の人でなくても取れますが、最近はイスラム世界論を受講して、イスラムの歴史を知らないのに、「イスラム教徒って、ちょっとなんか」と考えていた自分がものすごく恥ずかしいと感じたりします。そういう形で専門の知識というのは、自分の中で今どういう史観で見るか、どういう視点で見るかというところで、すごく役に立っていると感じます。

その上で今教職課程を取っていますが、それを実践として教育に生かしていかなければいけないと思います。ただ単純に教わったことをそのまま中学生や高校生に落としていけばわかるかという、まったくそんなことはない。

ではそれをどういうふうにわかりやすく教えられるか、グループにして教えていけるかという、実践的なところを生かしていかないといけないというところで、社会科教育法や教育実習の事前指導の講義などで、実践的に力をつけていくことができた点、できない点もあったかなと思います。

最後に、教職課程でよくしてほしい点としましては、広がりというか、広がりから出るつながりをもっと持ちたかったと思います。もちろんボランティアも大切だとは思いますが、目を向けてみればいろいろ募集しているところはあるけれども、大学生同士で教育について話し合ったことは、僕は本当に教えるぐらいしかないと感じます。

自分の中で考えていることはあるけれども、それを出して批判されて、もう一回考えてみようということがなかなかなかった。そういう意味で、横のつながりと縦のつながりが大事です。もう少し後輩に教えられることもあったかなと思って、そういうところを要望したいと思いました。

それでは非常に簡単ですが、これで話を終わりたいと思います。ご清聴いただきありがとうございました。(拍手)

司会 加藤さん、ありがとうございました。続いて梅澤英里さん、お願いいたします。

〈報告3〉

『教職を目指す学習と教職課程センターへの参加』

梅澤 英里

文学部英文学科4年の梅澤英里と申します。私から

は教職を目指す学習と教職課程センターへの参加について、お話しさせていただきたいと思います。

私が法政大学の教職課程を受けてプラスになったと思う点は三つほどあります。一つ目は、授業内での他学生との交流ということです。私がこれまで受けてきた教職の授業では、グループで話し合っただけで発表したり、そのとき偶然席が隣だった学生と一緒に与えられたテーマについて考えるという時間があり、ほかの人とコミュニケーションをとる機会が非常にたくさんありました。

私は大学生になるまでは、ほかの人と話すときに自分の意見をたくさん言うことに正直慣れていなかったのですが、この教職課程での活動を通して、相手の意見を踏まえて自分の意見を言うことにすごく積極的になることができたと思っています。

こうしたことは教員になった際に、多くの生徒たちや先生方に自分から積極的に話しかけることや、相手の気持ちを考えて適切な応答をすることにつながるのではないかと考えています。このような言葉のキャッチボールを円滑に進めることは、生徒たち、先生方との信頼関係を築くことにもなると思いますし、教員になる上で非常に大切なことだと考えています。

二つ目としましては、専門分野と教職との両立、連携がうまく図れるカリキュラムがあったということです。私は教職の授業では英語科に属するのですが、英文学科での授業と教職の授業をバランスよく組み立てられたことが非常によかったです。4年間で無理なく教員免許が取れることが、非常に魅力的でした。

特に英語科教育法という教職の授業では、英文学科の授業で学んだこと、例えば第二言語習得や音声学について再度学ぶことができました。個人やグループでの模擬授業も行うために、英文学科で学んだスピーキングやライティングなどの英語力を直接生かして模擬授業に臨むことができたと思います。こうした学部学科との連携が図れる学びというのは、両者の授業を受けたときに納得するきっかけとなったり、あるいは自分で新たな発見をするきっかけになるのではないかと感じています。

三つ目としましては、教職グループでも学べたことです。法政大学の教職課程では、先ほどもお話があったのですが、教職課程センターで教職グループ、教員サークルという、教員を目指す学生同士で学ぶ機会があります。そこでは主に教員採用試験に向けた対策が行われており、主に筆記試験対策、面接討論、模擬授業などを仲間とともにしています。

私が印象に残っているものとしては、例えば筆記試験対策があります。春休み期間中に行われた講座に出て授業中の仲間の発言を聞いたことで、自分に足りな

い知識が何かに気づくことができたと思います。

また講座が終わったあとなどは、仲間とともに話しまして、「自分はこのテキストを使って勉強しているけれども、〇〇ちゃんは何を使って勉強しているの?」とか、昼休みに「何時に起きて勉強している?」とか、そういった会話をお互いにする中で非常に気分転換にもなり、相手も頑張っているから私も頑張ろうと、モチベーションをずっと保ち続けることができたと感じています。仲間の勉強する姿を見ることで、自分自身を鼓舞することができたのではないかと感じています。

もう一つ印象に残っているものとして、模擬授業があります。模擬授業では主に授業を行う学生がいて、残りの学生は全員生徒役となりますが、特に教科を問わずに集まって練習した際には、他教科を専門とする学生にとってどこがわかりづらかったかという意見は非常に参考になったと思います。

また専門教科が同じ学生からは、板書や授業の内容、全体的にどうだったという細部にわたるところまで意見を聞くことができるので、次回自分が授業をするときにどこを改善すべきかをすごく明確にすることができたと感じています。

また教職課程センターの先生からいただいたアドバイスを、模擬授業を行った学生だけではなくて、その場で全員で共有することができるので、そうしたところも非常に魅力的だと感じています。

もっと学びたかった点としましては、2点ほどあります。一つ目は、学習指導案がなかったことです。先ほどもお話があったかと思いますが、私がこれまで受けてきた授業では、あまり学習指導案を書く機会がありませんでした。ただ、特に教育実習をした際などは、授業構想を練るときに学習指導案を書くことが前提となっていて、授業構想をきちんとしていく上で、学習指導案を練習する機会をもっと増やしていけたらと感じています。

二つ目としましては、中高生との交流の機会ということです。教職課程では教員になるための多くの知識を身につけることができますと思いますが、教員採用試験の勉強をしている中で、実際に学校現場を見なければわからないこともあるのではないかと感じました。

それは教育実習という形で経験することができると思いますが、2~3週間という期間はやはり短いので、スクールボランティアや教職インターンシップという形で実際の学校に赴く実習がほかにあればと思います。そこで先生方の動きや中高生たちとの交流を通して学ぶ機会を得ると、自分自身が教員になったときのイメージがとてもしやすいのではないかと感じています。

最後に、現在教師を目指している後輩たちには、教

職課程の授業を真剣に受けてほしいということと、学んだことを生かして各種ボランティアなどの活動に積極的に参加していただければと感じています。

私も去年から教職インターンシップに参加させていただいていますが、実際の授業や先生方の生徒たちへの接し方など、直接見ることで大学で教わったことを頭の中でリンクさせることができます。生徒同士でトラブルが起きた際などに、教育心理学や教育相談で教わったことが非常に有効だと感じます。なので教育実習やボランティア活動を通して、自分のなりたい教師像を具体的に描いていただければと感じます。以上です。ありがとうございます。(拍手)

司会 ありがとうございます。それでは続きまして久保田志ほりさん、お願いいたします。

〈報告4〉

『教職の現場から大学時代の学びを振り返る』

久保田 志ほり

こんにちは。キャリアデザイン学部 2013 年度卒業生、久保田志ほりと申します。簡単な自己紹介はお手元のレジュメに記載させていただきました。現在は埼玉県にあります私立本庄東高校附属中学校のほうで、2 学年の副担任をしております。今日は「教職の現場から大学時代の学びを振り返る」を議題といたしまして、短い時間ではありますが、レジュメに沿ってご報告させていただきます。

まず、1 番をご覧ください。「教員養成の大学」ではなく「大学における教員養成」のメリットについて、自分が大学で過ごした 4 年間で教員としての 2 年間で踏まえて、お話いたします。教育現場では、教育や学習など通常学校生活といわれて予想し得ることばかりが起こるわけではありません。先ほど高村さんのお話の中にもあったように、発達障害を抱えた生徒が普通学級のほうにもいるのが現状です。

極論、教員に求められる力とは、私の考えではありませんが、授業力や指導力などの教育の方法論や技術よりも、自らの体験を踏まえた語りかけが重要であると考えています。そもそも教育とは、生徒の今から過去を想像して、未来をともに描いていく過程に寄り添うことだと私は思います。

その過程では、授業や生徒指導の方法論よりも、教員自身の教養の深さや多角的な視点が必要不可欠となります。学力試験を主とする教員採用試験合格を一つの目標として教職課程を終えることよりも、つまりは教員養成の大学よりも、教育以外の各分野を学ぶ中に教育的知見を持つことのほうが重要であると、実際の教育現場で学んで思いました。

考えてみたい点の第 1 は、「詰め込み型教育の意義と新しい学びへの移行」ということです。先ほどの尾木先生のお話の中にも少しありましたが、事前にいただいた資料の中に詰め込み型教育に関する記述があり、気になる場所であったので、私自身取り上げてみました。

私はいわゆる受験対応型の詰め込み教育の進学校での高校生活を終えて、この法政大学に入学しました。そして今その母校に着任して、詰め込み型教育を進める学校の体制と、自分自身が望んでいる社会に出たときに生かせる学びの狭間で、どうすることが今いる生徒にとって大切なのかについて、自分自身も模索中です。

私自身の経験から言えば、高校生活までの詰め込み型教育の基礎があったからこそ、他者に発信して相互に意見を交換し合う大学での学びが生かされたと感じております。どちらも否定することはできませんが、現状では、将来を切り開く大切な突破口である大学受験が学力試験を中心に行っている以上、中高における詰め込み型教育はある種やむを得ないと思います。

自ら考え発信するという本来の生きる力がどれほど育っていても、机上の学力が伴わない限り希望の進路に進めないのが現状です。だからこそ自ら考え発信するという生きる力は、大学の 4 年間で確実に身につけていかなくてはならないと思います。

法政大学の教職の授業は、それらを養う機会が多いと、在学中から感じておりました。というのも、少人数の授業はディスカッション形式で行われるものが多く、試験内容も教科や教育に関する知識を問うというよりは、自らの考えを論理的にまとめて考察するものが多かったように記憶しております。こうした訓練を 4 年間続け、それを取得してこそ社会に通じる本物の学びになるのだと、私は考えています。

考えてみたい第 2 の点は、「ボランティア活動を通じて得たもの」は何かという点です。現場の課題として、教員を目指す学生に足りないと感じるのは学外の多様な経験であると思ったからです。

私は在学中、チーム・オレンジという東日本大震災復興支援サークルに所属していました。このサークルに所属することになったきっかけとしては、自分自身がこの震災でいとことおばを亡くした経験があったからです。なぜ自分が生きたのか、自分が生かされたのかという苦しい自問自答の中で自分自身を支えてくれたのは、同じ志を持った、同じ年代の学生たちの存在でした。ボランティアセンターの職員の方々をはじめ、学校側の多大なる協力を得て、私たちはボランティアをすることができました。

その経験があったからこそ、今いる生徒たちに伝え

られることがたくさんあります。心の傷との向き合い方、他者と共存して生きていくことの尊さなど、学校が命や人権に関する価値観を養う場であるからこそ、机上の学びを越えたボランティアという経験は、今の教員生活に生きているといえます。

教員を志すのであれば、とにかく何でもこうした経験をしていくことが大事です。どうしても経験が足りず、問題が起きたときの的確なアドバイスができない教員がたくさんいるのが現状です。生徒にとってはどんなに年を重ねた教員であろうと1年目の教員であろうと、先生であることに変わりありません。経験不足を理由に生徒に的確なアドバイスができないということは、あってはならないと思います。机上の学びにはどうしても限界があり、そこで得たものは机上の空論となり、学級内では独りよがりのただの説得にしかならないと私は考えています。

とはいえ、この机上の学びがまったく無意味なわけではありません。私はボランティアを始める前から、教育学以外にも社会学や地域コミュニティ論、心理学などを学んでいました。並行して続けていると、ある瞬間にボランティア活動と机上の学びが結びつき、自分の中で答えを導くことができます。現在その答えを持って、教壇から、生きること、命のことについて、教科や道徳の時間を通して発信しています。

一つ私自身の実践を取り上げると、昨年度まで私は本城東高校におりました。その本城東高校の最後、3年生が卒業する直前に、道徳の授業としてこのボランティアの経験を話させていただく機会がありました。その機にこのボランティア活動の中で撮った写真や、そこで接した方々の話などをパワーポイントを通して話したとき、涙する学生がいました。

そのクラスは正直あまり雰囲気のいいクラスではなくて、いじめも普通にあったようなクラスだったのですが、その話の中で私が語ったのは、いずれ自分自身がやっていることを後悔する日が来るのだということです。自分自身もそうですが、今一緒に学んでいる友だちがずっと生きているとは限らない。いつ命の終わりが来るかわからないということを道徳の授業の中で話したところ、生徒たちは何かを感じ取ってくれたようです。

その後、今年、つい最近ですが、大学生になった生徒たちが高校にきて、いろいろ私に話してくれました。ボランティアサークルに所属したという話を聞くと、伝わったのかなと思ったりします。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

〈討論概要〉

以上の報告に続いて、若干の小休憩を挟んで、会場

からの発言に基づく討論が行われました。司会は遠藤野ゆり准教授が担当しました。討論の柱は、以下のようなものでした。

(1) 本学の教職過程を履修する学生から、「教職で勉強していくにあたって、情勢に鋭くなるにはどう学習していったらいいかと」という問いが出されました。具体的には「18歳選挙権」などが大きな話題になる中、公民科を教える立場になった時、いったいどのような学習をしておけばいいのか、またその学習について、「今の教職課程の授業では考えるというところが少し足りないかな」という印象があり、ただ教員の話聞いて、ああ、そうなんだと思うところで終わってしまっている状況」があり、課題ではないかと問題提起がされました。それに対しては、現場の教員からは、「民主主義って何なのか、人権って何なのか」というようなことについて、研ぎ澄まされた感覚を学習全体の中で学んでいく、そういう学びを大学としてしっかり準備していくこと」が必要ではないかななどの応答がありました。また別の現場教員からは、「情勢に鋭くなれ」ということは、社会の現実をしっかりと見ることでであると共に、「困難を抱えた人びとに寄り添い、他者の内面に共感し、その人の思いを聞き取る耳を持つこと、それから差し伸べる手を持つこと、そしてそのへんを基準にして自己開示できる力」というか、自分を開いてみる、そして自分を開いた相手のこともきちんと受け止める」そういう力量と一体のものではないかという指摘もありました。

(2) 現場の教員からは、「団塊世代の大量に教員に採用された時代の教員と今の採用された若い先生方の置かれている違いの一番大きな点は、学校の教職員集団の人間関係が非常に大きく変化してしまった点」にあり、また教員管理のシステムにも大きな変化があって、「教職員も働き方の問題で非常にブラック的な職場になっている。そういう状況下で、孤立した一人の人間として評価されたり頑張らされたりしている中では、どうしても自分だけが頑張るという形でそこに埋没してしまう」可能性が高く、「学校の教育力を全体として高める役割を上手に果たしていくような学校づくり、あるいは職場の教員関係づくり」が大きな課題になっているとの指摘もありました。

(3) ボランティア活動への参加は、教育についての知識やスキルを獲得する上で不可欠ではないかと、議論の大きなテーマになりました。学生からは、活発な参加の経験が出されると共に、同時に、まだ学生の多くが、少し勇気を出して踏み出してみればいっぱいチャンスがあるにもかかわらず、そういう機会(法政大学にも多くの紹介や参加のシステムが組み込まれている)が利用しきれていない現状も出されました。「教職

課程としてどうも一歩踏み出せないというのを、ちょっと後押ししてあげるのが大事なのではないか。僕も違う大学の先輩と初めてボランティアに行った。一回ボランティアをすると、じゃあ次はここに行ってみよう、と、どんどん興味が広がっていくんですね。これをして、あれをしたい、ここはどうだ、じゃあもっと違う現場を見てみたいなど、自発性が活性化される、「でも残念ながら僕が思うのは、教職課程でのボランティアという存在は、掲示がしてあるだけで終わっている。スクールボランティアの教職インターンに行けばという意見が登壇者の中からもあったと思いますが、僕はそのスクールボランティアの教職インターンの存在自体を知らなかったの、もう少しアナウンスだけでもあれば、一歩踏み出しやすいのかな」というような注文も出されていました。本学教職課程の教員からは、「大学側がどうという学びの場を提供するか、チャンスはどう与えるかということもすごく大事」けれども、同時に、学生の「自発性」を発揮して欲しいという注文も出されました。そしてその「自発性」を積極的に支えるシステムを作っていくことを大学の課題としたいという意見も出されました。本学で3・11のボランティアを経験して、現在学校現場で生徒の活発な社会参加を指導している教員の方からは、「ボランティア自体が自発的なものであるときに、自分で動いて、そのきっかけさえも自分で見つけに行く。そうでないと、実際ボランティアに行ってみても、ただ自分はボランティアをしまったという、履歴書に書くような経験になってしまうのではないか。そこから何かを学び得て、自分が将来に生かしていく。人を手助けしたり、人のことを理解していくことで自分も成長していく学びに変えるとなると、きっかけづくりも自分でしていくことが重要ではないか」との指摘もありました。

(4) ボランティア活動は、同時に、社会の現実に触れる機会であり、教師としての姿勢を作る大きな土台だということも指摘されていました。「本当に今の時代は胸が痛くなる時代」であり、子どもの貧困の問題も

深刻になっており、「自分のクラスの中の子たちがどういう生活をしているのか、なかなか教員にはわからないわけですが、そういうルポを読んでも、非常に困難さと、そこでも生きて頑張っていこうとする努力を、家庭や、お父さんやお母さんや保護者の方、子ども自らが一生懸命やっている」現実があり、そういう中で「困難を抱えた他者と共存しながら一歩前に一緒に出ていく」ことが必要であり、そういう精神こそがボランティア精神とつながっているのではないかと指摘がありました。そしてそういう現実を踏まえて、これから教師になる若い学生には、「生活保護基準の世帯が子どもの中で6人に1人といわれる様な状況の中で、中間層が崩落し、教員がどうというふうに援助していくのか、それを受けてどんな授業をしていくのかということが、今の若い人たちに問われている」というふうに受け止めて欲しいと指摘されていました。

(5) また、教師になっていくためには、単に教職課程を取得するだけではなく、「専門」をきちんと身につけるという「大学における教員養成」という法政大学の制度、「総合大学における教員養成」の精神が非常に重要だという指摘もなされました。今それを閉鎖的にしようという流れの中で、非常に重要だと強調されていました。「そのために一番重要なのは人間性を磨け」ということで、それは自分のポリシーを持ってほしいということです。総合大学で教育問題だけでなく、例えば物理の問題も知っていて、ああ、論理的構成が必要だなど。そうやって自分のポリシーを持って教育現場に望み、その姿勢に生徒が主体という子どもの権利の実現という視点を加えて、本当の教師としての力量を獲得して欲しい」という期待も表明されていました。

時間の不足もあって、まだまだ言い足りない部分もあったと思いますが、法政大学の教職課程に対する率直な注文も含んで、実り多い討論を進めることが出来たことを、参加者の皆さんに、感謝いたします。(この部分の要約は佐貫浩が担当しました。)

〈講演 2〉

『総合大学の強みとは～教育問題の実態を踏まえて～』

法政大学教職課程センター長 尾木 直樹

本当に皆さん、会場からいろいろな意見を出していただいて、今日の討論のテーマも非常に深まってきて、鋭角的な議論がされているなと思います。どうもありがとうございます。

すごく重要なのは、今土肥先生もおっしゃいました

が、教員養成大学ではない、イコール総合大学であるという意味ですね。開放制の下で法政大学はこの制度を作っているわけですが、今それを閉鎖的にしようかという動きもある中で、この問題は非常に重要だと僕は思います。ただ、今の状況がベストだとまた思い

ません。いろいろな課題があって、作り上げていかなければいけないことは多いと思います。

法政の卒業生の人はおおらかでのんびりしていると、僕はさっき冗談ばかり言いました。現場にいたときに何人か同僚となった人がいますけれども、本当にチマチマしていないんですね。僕から見ると、別に教員養成大学がいけないというわけではないんですよ。気を使ってるのよ。現にそういう人がいるから言いにくいんですけど、僕から見てみると、教員養成大学の先生には先生のよさがあります。非常に緻密でスキルは高いんですね。赴任した1年目から全然違うんですよ。

けれども40、50になってくると、総合大学を出た先生のほうが、僕は人間的な魅力を感じました。そうかといって教員養成大学はおかしな人ばかりとか、そういう意味ではまったくないのですが、印象に残りましたね。総合的に学んでいるという学びの広さと専門性ということが、一つあると思うんですね。

それと、一番大事なものは、キャンパスライフだと思うんです。キャンパスの中でサークル活動とか、あるいは何でもない食堂でのふれあいとか、いろいろなオープンキャンパスで他学部の学生さんと一緒にやったり。

そこで学んでいくものは、理科系の人には文系から見ると独特なんですよ。例えば法学部の人には法学的だし、教職入門をやって毎回レポートを出してもらって、ああ、法学部らしいな、という特徴があるんですよ。学生の皆さんから見るとお分かりにならないかも知れませんが、人科は人科だなという感じがするし、キャリアはキャリアだな、明るいとか、いろいろ特徴がものすごくあるんです。本当におかしいんですよ。パーッと3分の1読めば学部がわかる。そういう多様な人と生活をしているということがすごく大きい。

生徒と会ったときに、100人いたら100通りの個性があって、先生方も30人いたら30通りの個性があるわけです。そこでの対応能力とか、あるいは同じ同僚の先生を理解する力とか、何よりも生徒理解の力がやっぱり僕、すごいと思うんです。

教えるというこちらから出していく力は、はっきり言って最初の5~6年は教員養成大学にはかなわないと思います。だけでも生徒との対応能力とか、多様な例えば生活のこと。先ほど本山先生だったかな、おっしゃっていただきましたが、今の高校生の貧しい生活というのは大変で、高校中退者が今は貧しさゆえに出てくるような時代に入っているわけですね。子どもたちの貧困は6人に1人でしょう。シングル家庭では54%が子どもの貧困家庭に入っています。

ちょっと話がそれますが、この間、僕は姜尚中さん

と対談する場面がありました。そのときに僕が今本山先生がおっしゃったような教育のことを報告したら、姜先生が、「先生、日本はフランス型の移民社会になりましたよ」とおっしゃって、なるほどと思ったんです。

4割の非正規労働者の出現と、さっき言った子どもの貧困率の高さ。東京都でも就学援助金をもらっている子が22%なんですよ。沖縄なんか34%が貧困層ですよ。そこまで来た日本の状況。フランスの移民の人たちが一つの層を成していますよね。非常に貧しい層としてあって、いろいろな政策上も大変なのですが、日本もそれと同じ。

僕が皆さんぐらいの年のときには、一億総中流と言われた。みんな自分の中流だと思っていたんですよ。実際はそうでもなかったんですけども、そう思えるような希望があり、年金制度の問題から何にしても基本的な生活の保障があったんですね。それが今、ほとんど崩壊しているわけですね。すさまじい崩壊ぶりだ。

僕もうちの女房のお母さんをこの9月から引き取ったんですね。そして生活を一緒に始めたら、介護や福祉のところが崩壊ぶりはこんなにひどいのか、これでは生きていけないじゃないかと身に染みて感じるんですね。えー、日本はそんなはずじゃなかった。僕は日本は別の国になっていると思います。だから姜先生が「フランス型の移民国家になってきたんだよ」とおっしゃったものの言い方は、ある面で非常に鋭いと思いました。

もう昔の日本ではない。そこで生きている高校生なんですよ。だから私学のお金が払えなくて、都立に変わる子たちもいますよね。話題になりましたが、今やそれもできなくて中退なわけでしょう。

この間シングルファーザーとの座談会をしたのですが、お父さんが一生懸命娘さんを育てて大学まで出したというんです。去年の4月から勤め始めた。高校でも奨学金を借りた。大学でも奨学金を借りた。

そうしたら、初年度に4月の給料から返さなければいけないのが、なんと5万円だということですよ。それでアパート代と奨学金を払ったら、生活費がカツカツだということですね。映画を見に行くこともできない。これは奨学金をもらって大学に行かせるべきではなかったかと今悩んでいますと、おっしゃった。そんな悩みを持たせる国家になったのかと、すごくつらい思いがしたんですね。

つまり、そんなふうにいま、中学校の教師も高校の教師も、大学の私たちも同じです。今大学生の奨学金の返還が大変なこと。アメリカでは大統領選挙で大変ですが、公立大学無償化を掲げる候補が若者の人気になっているでしょう。日本だけではないかも知れませんが、そういう社会が急激に変わっている中で教師

になろうという方は、そういう学生とともにどう生きていくのかということです。そういう子どもたちと、ともにどう生きるのか。

もちろんわかる授業をやる。これは大事なことです。ちゃんと学習意欲をわかせるとか、人間形成をすることも大事ですが、ともにこの 2016 年を生きる仲間なんだ。そして苦勞して生きておられるお父さん、お母さん方と仲間なんだという連帯意識というか、その感覚を持っていない限り、僕は非常に教師というのは…。それを持っていけば、未熟であっても生徒から信頼を得ることができる。保護者からもついてきてもらえる。一緒に改革していくことができるのではないかと、僕は一番強く思いました。

それからもう一つ重要なことは、実は教えるということも大事ですけれども、子どもから学べるか。どこまで学んでいけるか。子どもの素晴らしさとか、非行の A 君がちょっとしたことをきっかけにふっと変わり始める。そこをしっかりとキャッチできるか。あるいはそういう変化をきたすことができるようなきっかけを、自分が作ることができるか。それは直接な関係もありますし、学級経営上のこともあるでしょう。あるいは部活の指導の中でか、生徒会の指導の中でかわかりませんが、作っていけるか。

それは理論的にも作れるんですね。優れた実践家はたくさんいますし、著作物にもいっぱいなっていますけれども、そういうものをどれだけ身につけられるかというのも極めて重要です。そのときに役に立つのは、教員養成課程でないという総合大学のよさ。いま自覚はされていないと思いますが、ここで皆さんが身につけているものが生きてくるのだらうと思っています。

〈まとめ〉

『教育的真理探究のための学びと共同へ向かうために』

法政大学教職課程センター副センター長・キャリアデザイン学部教授 佐貫 浩

皆さんの参加でこのような討論ができたことを喜びたいと思います。最初どんな形で討論が進行していくか私も見通しがなかったのですが、もちろん尾木先生や報告者の報告も争点のあるものであったと同時に、発言される方が自分の思いを率直に表現して、議論の空間を作っていただいた。そういう意味では、結論が出たわけではありませんが、本当に大事なことを議論する集いが作れた感じがしております。

私は何点か感想を述べさせていただきたいと思います。まず第一に、教師になるということは、子どもの人間としてのありように共感する力が問われます。私

提言もいろいろいただきましたけれども、本当にボランティア性はすごく大事だと思います。ただ、お返しするようで言葉は悪いのですが、学校の支援員やボランティアを募集していますというのは、全部相談室便りで毎月出てるのよ。「読んでよーん」という感じで、出ているんです。その発信は丁寧すぎるぐらいだと、僕なんか思っているんです。それで僕は満足しようとは思いません。そうおっしゃるのだったら、また考えなくてはいけない。皆さんから学んで、私たちも改革していこうかなと思っています。

そんなところで今日は本当にいろいろなことが交流できたり学ぶことができ、よかったなと思います。本当に今日はありがとうございました。(拍手)

司会 ありがとうございます。話は尽きないのですが、もうすでにだいぶ時間をオーバーしておりますので、時間の関係でここでいったん討論自体は閉じさせていただきますと思います。今日の話はいかにボランティアに、自発的に、自分たちが本当の教育現場を知っていくか。そして後半に話題になりましたような現在の子供たちが置かれている状況を知って、そういうことを踏まえた本当の実践力をいかに大学で培っていくかということになったかと思っています。

筒井先生の言葉を借りれば「話せばいいんですよ」ということでしたから、ぜひここで突き詰めなかったことはそのまま持ち帰っていただいたり、あるいはこのメンバーでいろいろな話ができたらと思います。そのことも踏まえて、いったんここで討論を閉じまして、まずここでまとめをしたいと思います。本学教職課程センター副センター長の佐貫浩よりお話しを。

は今、孫が 2 人突然できたのですが、孫の顔を見てみると、これを傷つけたり悲しませてはいけないという愛おしさの感情を本当にあらためて感じるわけですね。人間というのは自分と一緒に生きている人間に愛おしさを感じ、その人が喜んでくれるような関係の中で生きられる。これは本当に人間的な感情なんですよ。

ところが今はどうでしょう。例えば大学生は、ともに生きている大学生を愛おしいと思う関係で大学生活を送っているか。高校生もそうですね。いじめ、競争、自己責任、それから貧困と格差という中で、先ほど尾木先生も報告されたような、貧困という困難を抱えて

いる子どもや親がいる。

それから尾木先生は今日お話しされませんでした。この前の自動車事故で4人の尾木ゼミ生が亡くなりました。その原因をたどっていくと、人間が人間らしく生きられないようなシステムが広がっている。そうすると人間への愛おしさは、そういう事態に対する怒りなり探求の目につながっていくのです。

しかし今、大学生や高校生は「優しい自分」を演じて、その空間の中で孤立しないで自分の居場所をどう確保するかということに汲々とさせられるような力学が働いています。本当にその人が思っている思いを表現しあって、そこに人間的共感をつくり出しながら一緒に共同していくという空間がなくなっている。

教育現場に行ったらそういうところを打ち破って、子どもとどうやって共感しながら子どもを支えるか。この力量が最も決定的に問われるわけです。それは、大学の時代にそういう共同関係を形成しないままで現場に行っても、子どもに会えばそういうふうになるだろうということにはならないのです。

表現というものは、本当の自分の思いを表現するという事です。それを閉じている。閉じさせられている。そういうことでは相手もわからないし、自分もわかってもらえない。そういう空間が現代社会の中に作られてきて、うまくいかないのは自己責任だという論理が働いている。

大学の中で、お前は学力が低いとか、就職できないのは自己責任だという関係で他者を見てみると、子どもに対しても同じ関係になるわけです。大学の中で学生の皆さんも、今いろいろな困難を抱えている。でも表面的な議論ではそれは出てこない。そういう中で本当に他者に共感できるような自己形成や学びが大学でできるかという、できない。これをどうやって打ち破るか。

第二点は、公共性という問題です。それは、大事なことが皆の中で話せ、そしてその中で関心を共有していくことができる空間があるかどうかということです。しかし今大学の中で、社会的な困難の問題を学生同士で話し合うのは、なかなか困難ですね。いわば公共圏というものが閉じられた空間で、お互いに自分の居場所を確保するための私的な話題しか出せない関係になっているわけですね。

吉牟田さんが情勢に鋭くなれと言いました。情勢に鋭くなって声が出せるかと考えてみると、なかなか出しにくいですね。本当は現代社会に対して大学がその問題に突き刺さるためには、そういう問題を自由に議論し合う公共性空間が大学の中に作られる必要がある。そのことによって、大学の中に、現代社会に突き刺さる力を創り出せる空間が生れるのです。そういうもの

をどうやって作るかということが大学に求められているけれども、残念ながらそれはほんの少ししかできていない。そういう問題を考えていかなければいけない。

いまアクティブ・ラーニングということが言われています。でもアクティブ・ラーニングの土台には、アクティブ・シンキングがないといけません。現実に対して激しく真理を探究しようとする意欲のないところで形式だけアクティブな学習をやっても、ほとんど意味がないわけですね。大学生の皆さんが本当にシンキングということを実践して、それこそが自分を作っていく方法だ、そういう大学の学びの空間の中に今生きているという実感を持っているかどうかですね。こういうことを考えてみたい。

そのことにかかわって、久保田さんが高校での学びは受験もあってやむを得ざることもあるけれども、大学に入ったらもう一回新しい学びを作り出さなければいけないと言いました。成長の発達段階としての青年期というのは本質的にそうなんです。青年期というのは単に学びの形態が変わるのではなく、社会と自分がもう一回どう出会い直すかという成長の時期なわけです。

ところが今は、「お前、18歳選挙権とかそんな余計なことは考えないで、とにかく受験勉強をしろ、社会の問題に自分の関心を奪われるような無駄なエネルギーは使わないで、とにかく大学に行ける勉強に集中しろ」となっている。本当の青年期を生きることは許さない。これが日本の若者の成長する空間になっているわけです。

これをどうやって打ち破るか。それを打ち破ったときに、自ずとその空間の中に議論が立ち上がり、その空間が社会を問題化する。そういう共同の探究の場としての大学を、どうやって今作るかが課題だと思います。

第三点です。ボランティアの問題がずいぶん出されました。これは非常に重要だと思います。しかしボランティアの本質は何かというと、実は今のままでは人々が人間らしく生きられない、そのシステムを立ち上げないとこの社会はやっていけない、そういういまだシステムとして存在していないものを自分の意志で、自発的な努力で作り上げるという、新しい社会的な仕組みを人と人との新しいつながりの中に生み出していくことがボランティアだと私は思っています。

だからボランティアをやったときには、その対象になっている事柄の持っている問題性が浮かび上がってきて、こんなものでは駄目だという社会分析の方法論につながっていくわけです。だからボランティアに参加するということは自主的であると同時に、社会科学の目を持って、社会そのものがどうあるべきかを探究し

ていく、その学びの場であるわけです。

そういうボランティアというものを今作り出さない限り、この社会は人々が生きられない社会になってしまう。ボランティアが大きく問題になり、展開したのは、伊勢湾台風で 5000 人が死んだときに、このままでは生きられない人々を支えるシステムをどうやって作り出すかということで人々が動いた時でした。3.11 もそうですね。にもかかわらず、社会はなかなか変わらないのですが。

そういう意味では本当に今、大学生がこんなのでは生きられない、もっと生きられる関係性と場所を自分の手で作ろうという、そういうボランティアに挑戦してほしい。

あえて言うと、私は教育現場で今提供されているボランティアの空間の多くが、こういう力量がある人を養成しますという形で組織されている空間で、そこに入ったある程度力量は高くなるけれども、その制度の中で生きられる人間を作ることに限定されたボランティア空間になる可能性が高いと思っています。その意味では、本当に自分の関心に従って、どういう認識とどういう活動を作り出すかに挑戦するような、現状を突き破るボランティアが重要だと、僕は思うわけです。

第四点です。今日議論されたことと逆のことを言うかもしれませんが、大学にいるときに教師になる力量を全部作れというのは無理です。教育現場が本当に成長していける学びの空間にならない限り、本当の教師は日本の中でしっかり育てていけないと、私は思っています。

だから皆さんに求めたいのは、教育現場に行ったときにその場をお互いに支え合い、学び合う空間を作り出す力量をつけてほしい。この力を持つことによって、学校でつけた力量がもう一回そこで吟味されて、本当に現場に役に立つリアリティを持った力に発展していく。そういう教育現場を作り出す。

それは民主主義という、児玉先生がおっしゃった問題でもあるし、教師同士がお互いに支え合う関係をつくることでもあります。お前はいい教育をやった、俺は駄目だと競争させる空間ではなく、子どもがすごい学びの力を獲得すれば、ほかの教師の教育からも多くの学びを吸収できるわけですね。だから教師同士が協力して、子どもたちが成長していく空間を分担し合って、協働して作る。そういう関係性を作るような民主主義と人間感覚、そして他者に共感する力量を持って現場に行くことによって、現場が学ぶ空間に変わっていくことです。

昔は学生は教育サークルや教育系学生ゼミナールなどで、現場の先生の集まりの中に参加して、いろいろ

学んでいきました。残念なことに、今はそれがありませんね。また、先生方もなかなかものが言えないわけです。そうするとものが言えなくて困っている先生方の声も聞けず、学生も現場の教育についての認識や課題をつかめないまま現場にはいることになります。そこは決定的な弱さです。現場の先生と大学とがそういう関係を作れるようになるといいなと思いました。

第五点、最後ですが、指導案と授業についてふれたいと思います。ある教師は、「子どもをつかむ」という言い方をしています。教師が授業をするということは、その子どもに今絶対与えなければいけない、その子どもにわかってほしい事柄についての学習を提供することだ。それが教師の責任だ。だから子どもをつかむことなしに、教育内容は作れない。目の前にいる子どもをどうやって支えるか、どういう認識をもってほしいかという、そのための教材や方法を絶えず作り出すということです。

そしてそれをやっていると、科学とは何か、文化とは何か、授業が本当に真理を探究したり人を支えるものになっていくためにどうすればいいかと、それ自身が一つの科学としての教育学の探究になるわけです。そして、人間をどう支えられるかということまで分析と探究が進んでいかなければならないのです。そして、そういうことを考えながら授業指導案を作っていくと、それ自身が一つの自分の人間と科学の探究につながっていくわけです。

そのときに単に教師になるだけではなしに、専門の学問が生きてくるわけです。そして法政大学の場合はそのような専門を、その本質をきちんと身につけることにおいて人間的価値としての文化を身につけ、それを子どもをつかむことを通して子どもに必要な文化として再構成していく。

そのプロセス全体が探究の過程だし、場合によっては真理探究のためのあえていけばたかひの過程なのです。今、授業をするということは、真理をどうやって明らかにするか、そのための新しい価値、方法、内容をどう生み出すかという意味で、それ自身が学問の最先端にあることなんです。

そういうことを考えれば、教育実習に行くということは、教師にならないとしても、学びの中にある学生の皆さんにとって本当に価値ある挑戦なのです。そういう中で、自分を鍛えていく。大学の中にはいろいろな現場体験がありますけれども、正直なところ、現場体験で最もリアリティがあるのは教育実習だと思います。ただし、それをそういうものとして生かすかは、学生の皆さんの取り組みにかかっています。

そんなことを含めて、今日皆さんの報告の中でいろいろなことを考えさせられました。皆さんの出されて

いる課題を考えていく上では、大学としても今後いろいろなことを検討していかなければいけないと思うので、これから私たちの間でも議論をしていきたいと思えます。今日は本当にありがとうございました。(拍手)

司会 本日はたくさんのお話を頂きました。(中略) みなさま、ご来場ありがとうございました。(拍手)

教職課程センター多摩相談室主催シンポジウム

多摩でかたらう 2016

『子どもの気持ちが「わかる」』～若い教師へのメッセージ～

日 時：2016年12月21日（水） 17：30～19：30（17：00開場）
会 場：法政大学多摩キャンパス総合棟4階 第3会議室AB

シンポジウムの趣旨

教員志望の学生、地域で子どもと接している方を対象に、経験や知識の豊富な尾木先生から「子どもの気持ちが分かる」というテーマでお話をしていただいた。

年報収録の内容

尾木先生のお話を一部抜粋して収録。子どもと接する教員や地域の方にヒントとなるお話の内容となっている。

<プログラム>

- ◆ 教師志望の学生が語る希望・現実・不安
- ◆ 尾木直樹先生からのアドバイス
- ◆ 『子どもの気持ちが「わかる」』～尾木直樹先生のお話～

〈はじめに〉

尾木直樹先生よりあいさつ

法政大学教職課程センター長 尾木 直樹

どうもこんばんは。尾木です。今日は尾木ママというのは変だから尾木ですね。今日も実はゼミをして、今年最後のゼミでしたので、学生とお昼を一緒に食べたんです。「卒業論文も無事に終わってよかったね」と話をしていました。

ただ皆さんもご承知のように、今年の1月にバス事故でゼミ生の半分近くを失うという非常に苦しい思いをしました・・・1月15日でちょうど事故から1年を迎えるんですけど先程もカウンセラーの先生と学生相談室に行って、どういう風に1月15日を迎えればよいかをご相談しました。15日が来ることを考えるだけで胃が痛くなっているという学生もおりますので、これをどう乗り越えるか。最後の山だと思っています。年が明けて1月に入っても、全身麻酔をして手術を受けなければいけない学生もいます。というので、僕にとっては時間軸が2つあるような感じなんです。普通にこのようにして生活している、卒論指導をして、乗り越えさせていかなきゃいけない時間軸と、1月15日で止まったままの時間軸と。人生でこんな経験は初めてです。でも何とか乗り越えようと学生とともに決意しました。

そういう中で会場にいらっしゃる大学生の皆さんは教員になろうとか、教職に興味を持っている方が非常に多いと思いますが、福島の日本大学東北高校の相撲部で大変な体罰があったということをご存知でしょうか。のこぎりを腕立て伏せの下に置いたり、金槌で殴っていたんです。デッキブラシでも叩いていたようで。それで怪我を負わせてしまって、病院に行くことになって体罰が発覚したそうです。僕もこれまで沢山の体罰を検証してきましたけれども、みんな愛情からなんですよ。「この野郎、殴って殺してやる」とかね。亡くなってしまった子の場合でも、そんな気持ちで叩いている先生なんてほとんどいません。だから、愛の鞭と言われるのはわからなくはないです。でも愛には鞭はいりません。今日のテーマの子どもの心に寄り添い、子どもの心を理解しようとしていないのです。子どもの思いを汲み取らず、教員の思うがままに教育がなされている、これは教育とは言いません。そして日本のシステム的な問題が、特にフランスと比較すると、致命的だとわかります。文科省も今、特に自由民主党の文部会では原案がまとまっていますが、部活も

外部の指導者に委ねていく方向です。教育の改革も2020年に向けて大幅に変わりますよね。そこも少しお話できたらいいなと思います。皆さんと一緒に悩んで、一緒に希望をつかめればいいなと思っています。どうぞよろしくお願いします。

〈講演〉

『子どもの気持ちが「わかる」』 ～若い教師へのメッセージ～

法政大学教職課程センター長 尾木 直樹

みなさんどんどん手を挙げてくださって、非常に熱意があって、すごく嬉しいです。ちなみにスポ健の人たちはどれくらいおられますか？・・・結構おられますね。僕は教職課程センターに属しているんですが、僕の願いというのは法政のスポ健の卒業生が間違っても体罰を振るうことがないようにと重点課題にしています。体育の教師を輩出する大学でもあるわけですから、それはとても力を入れていますね。だから体罰は間違っているんだという認識、どんなに子どものことを思っていたことでも体罰は違うということ、これが最初に伝えたい1つのことでもあります。あといくつか、SNSや思春期の問題とか、いろいろありますのでまずは一番法政大学にふさわしいようなテーマから入りたいと思いますが、やはり体罰の問題なんですよ。よく昔は殴られたとか言うんですよ。「先生に殴られた！」と言って家に帰ってくると母親に「あんた殴られるようなことをしたのか！」とまた殴られたという人もいます。

日本の体罰の歴史というのは明治12年の教育令の出始めのころからで、明治の初期に小学校令とかいろいろと整えられましたよね。その明治の最初から、日本では「体罰これを禁ず」と明確に示されているんです。それで、戦前はどうかだったかという体罰が吹き荒れていたといいますがその期間も体罰は禁止でした。それから戦後になり新しい教育基本法になって、ずっと体罰は禁止ですよ。一貫して。これだけ長い歴史の法律があるのにもかかわらず、今は学校教育法第11条の但し書きで禁止されていますがこれだけ横行している法律はありません。だって赤信号は停止しなきゃいけないでしょ。それを無視したとたんに反則切符とられて大変なことになりますよね。ところが体罰に関しては結構緩かったわけですよ。昔でいう少年院、感化院で一時期体罰が認められたという歴史があるだけです。日本のこの法律というのは海外でも非常に評価されているんですが、守れていない国ということですよ。アメリカでは50州のうちの18州南部を中心に体罰は認められています。シンガポールでも体罰は認められているんです。ところがね、日本のような体罰があるのは、世界広しといえどもどこにもありません。そ

れは例えば、アメリカの南部を中心とする18州の体罰はルールが決まっているんですよ。体罰を行えるのは校長先生で、叩くところはお尻と決まっています。叩く道具はこのこぎりでも金槌でもない、パドルという、ご飯をよそう時のしゃもじがありますよね。あの5倍くらい大きいものだと思ってください。南部では奴隷を、鞭打つ時に使われていたのが南部が多いんですが、木で作ったパドルでお尻を5回以内で叩くというのがルールです。そして叩く時には保護者の了解が得られていないといけないということと、教育委員会に届け出を提出しなきゃいけないんです。これだけのルールがあるんですよ。それから立会人も必要です。だから親が自分の子に対して体罰を加えていいですよというものです。ルールの中で体罰を加えてくださいという契約を交わすんです。つまり体罰は体に与える罰なんですよ。あくまでも。だから体罰には江戸時代にも、鞭打ちや100叩きの刑もありますがそれと同じです。この日大の相撲部の件はリンチです。その時の感情任せで叩いていますから。その時の怒りに任せて。教師が生徒にふるうリンチなんです。

例えばシンガポールでは、これは体罰をあの子に加えようということが決定されると体罰委員会が組織されます。そして校長先生を筆頭にして体罰委員会が作られ、体育館に全校生徒を集めて、全校生徒の前で鞭打ちされるんです。そして鞭を打つ時に、ちゃんと体に傷がつかないように柔道着のような防着を着るんですね。鞭を打てるのは校長先生ではなく、鞭打ちの研修を受けた資格のある先生。それから全校生徒が集まっている中で鞭打つのは5回以内と決まっています。その鞭は本人には大して痛くないのにすごい大きな音が出るようになっているんです。痛くないのだけれども、音がして「恥ずかしくてあんなことはもう二度としません」と言うんです。制度化して、教育委員会に報告し、保護者の了解も得ています。罰を受けるのも全部ルール化されています。これが体罰と国際社会では言いますが、日本のはリンチです。

部活で行われている伝統的なリンチは暴力、暴行、侮辱罪、名誉棄損ですぐ刑事事件になり警察が早急に対応し処罰すべきことです。だから、僕の考えでは日

本大学東北高校の件も先生がすぐに刑事事件にして、警察が処罰すべきだと思います。ですので体罰は力量のない先生が、口で言ってもわからないから体で覚えさせるといわれるでしょう。僕たち人間は言葉で生きているんですよ。僕たちは言葉で思索し、思考し、感情のコントロールも全部言葉なんです。心の中で、これ以上言いつぎたら本当に夫婦離婚になっちゃうからちょっと我慢しようとか。これは全部内言といいます。僕がさっきからべらべらと喋っているのは外言といいます。人間は内言と外言を使いながら思索します。だからボキャブラリーや言語能力が豊かであるということは、とても重要なんですね。

言葉で伝わらないことを体で伝えるというのは、痛みだけを与えるだけで、条件反射でストップしているだけなんです。動物の調教と同じなんです。ここどころ、しっかり見つめてほしいなと思います。リンチはやめる。そこどころは体罰の問題を考えるとこで大事にしてほしいなと思います。

体罰をやめることはできるんです。やはり学校は皆で実践していくものだと。校長先生、教頭先生、も含めてね。リーダーシップを発揮していくのは、校長先生であれば一番いいんですが、誰でもできます。そういうことでみなさんにはリーダーになってほしいなと思います。特に法政のスポ健の人にはね。さすが法政違うよ、ということ。

それから先ほどの SNS の問題についてお話したいと思います。最新の調査結果が出ていまして、高校 1 年生の約 6 割がスマホ・ネット依存になっているんですよ。依存というのはその調査での定義によると 2 時間以上スマホ・ネットと接触しているということ。多い子は土日だと 11 時間スマホに触れているとか。SNS 依存のなかでも女子の場合はきずな依存の子が多いです。女子はもともと「みんなで一緒だと安心」という傾向が強く、思春期はさらにきずな依存の傾向が強くなります。親離れをして、自分で精神的な自立をしていく時期です。そのような時に友達よりも親に自分の悩みを相談する子が増えてきたんですよ。大学生の女の子でもまだお父さんとお風呂に入っていることは珍しくありません。性的な自立が遂げられていないですね。仲良しファミリーではないんです。これを、親ラブ属と言います。「パパといつも腕を組んで買い物をする」、不気味ですよ。親のところから本当は離れて友達同士でつるんでいるのが思春期の時期なんです。スマホや LINE が使われていなかった時代にはコンビニの入り口に高校生がたむろしていた時期もありましたよね。怖くてお店に入れないとかいろいろ

なことが言われた時期があったでしょう。今では全く見られない光景です。今は LINE で繋がっていますからね。LINE で寝落ちする、深夜の 2 時 3 時までずっとしている子が珍しくないんです。友達とつながってほしい気持ちも分かりますが、哲学的なことを思索したり、思春期の孤独を味わう時間も必要だと思います。それから今ほとんど LINE を通してのいじめが多いわけです。教師もスマホ・ネット依存、LINE の世界についてしっかり学んでほしいと思います。スマホは禁止だよとただ言えばいいことではなくて、スマホを触るのは夜の 10 時で止めようとか、返信返さなくても返信がなくても大丈夫だとかルールを作ったり。そのような教師側のリードが不可欠だと思うんです。残念ながら我が国は、それが今野放図で放置状況なんですね。

アメリカのマサチューセッツ州に住んでいるあるお母さんが 13 歳の息子にスマホをクリスマスプレゼントとしてあげたんです。スマホと一緒に「スマホ 18 の約束」というお母さんが作ったスマホを使うための契約書が入っていました。契約というのが大事なところ。契約社会のアメリカらしいですね。契約書を読んで、子どももその契約に同意した上でスマホを使う。契約書をリビングとかに貼っておくといいですね。冷蔵庫にペタッと貼っておけばいいんです。これはルールだよ、と。一番大事なものはスマホは子どもに買い与えただけでスマホは親の所有物だということ。それからアメリカのルールで面白いのは、道に迷ったりどこか訪問するときに Google 地図検索するのは禁止されているんです。どうしてかわかりますか？それはつまり、今その機能に頼ったら行けるんですよ。間違いがなくて非常に便利ですがスマホの機能に頼らずとも「すみません、これはどのようにいけばいいですか？」と聞いたりしてコミュニケーションが生まれるでしょう。そのスキルが落ちてしまうということで、アメリカでは地図検索はやめてねというルールが入っているんです。非常に積極的で、面白いと思います。アメリカのルールほどまではいなくても、友達同士でルールを決めるとすごくいいですよ。それは、依存から脱出するため。思春期は何か依存したい時期ですが、思春期の大きな成長の要素として必要なことが 1 人になるということ。1 人になって、「そういえば尾木君がこんなことを言っていたけど俺はちょっと違うと思うなあ。」とか、「今日母親に怒られて「うるせえ」とか言っちゃったけど、母親が言っていたことがやっぱり正しかったんじゃないかな、俺言い過ぎたかな。」とか。そうやって反芻しながら深めていってます。葛藤をしたり好きな人を思い浮かべたりとかね。今 LINE で告

白したり別れたりするでしょう。やめてくださいね。ちゃんと目を見てしてください。リアルな人間関係を大事にするということがすごく大事で、1人になるということをしなければ自立はできません。こんなにLINE 漬けで、みんなお互いに依存しながらそれで20歳を過ぎてきてしまう。こんな状況で日本は大丈夫かな、と。恐ろしいです。その人たちが親になった時に子どもを育てられるだろうかと、非常に僕は不安に思っています。それから男子の場合は、ゲーム依存といってゲームに依存しがちです。韓国ではIT 戦略国家なんて言われていますが、授業でもどんどんスマホを使っています。シンガポールでも小学校4年生から、数学の授業は全部スマホです。電子黒板で授業をしているんです。そういう先進的なITの先進国家では依存の被害が出てくるというのは熟知しています。韓国では年に2回、小学生から高校生まで「K-スケール」というネットの依存度合を高めるもので依存度をチェックします。この子の依存度はどこまでなのかという。子どもたち全員のファイルがあるんですよ。数値化されていて、あるラインまで来るとこの子はカウンセリングに行かなきゃいけない、治療をしなければいけない、あるいは親に連絡をしなければならぬとか決められているんです。ですから韓国国内には、100か所以上のネット依存の治療のための病院があります。専門にして研究する大学もあります。日本ではネット依存治療の専門病院は少なく、専門機関で治療してほしいけどなかなかできなくて、ついには自治体主導で無人島で1週間スマホを手放す合宿をしたり、NPO団体が頑張ったりとか。そんなレベルなんです。だからこれは本当に致命的だと思います。

スマホの問題というのは、非常に重要で子どもの成長や発達を揺るがしていきます。子どもたちが成長できなくなる、自立できなくなるのは避けたいです。ですから都内でも各高校の生徒会が自主的にスマホ・ネット利用の自主規制をかけています。立ち上がった高校が面白いんです。ほとんどが受験校なんです。こんなことをしていたら成績がガタ落ちだよということで、それで、自分だけやめようと思っても、友達付き合いもあるから、生徒会が立ち上がって、夜の21時以降はやめましょうとか、みんなで同意してやめようという発信を始めたんですね。名古屋にある中学・高校の生徒会が中心となってスマホ・ネット利用についての冊子を作ったんです。生徒会がみんなにアンケートを取って冊子を作って。それがあまりにもすごくよくできているから市販もされているんです。結構売れています。そうやって、スマホの問題一つにしても、暴力の問題、行事の問題、何にしても子どもが主役です。

子どもの心をつかみながら、どういった風にして前進的にクリアしていくか。この姿勢が大事なことで、正しいことでも教師が「こうするよ。この本にこんな風」に書いていたから」なんて言うだけでは良くないと思います。

そして今や大変なことになっているのは、いじめの問題の克服ですね。ニュースにもなっていますが、青森県の中学2年生の女の子のですね、手踊りでニコッと笑っている真っ赤な傘をさした写真が、ある市の写真コンテストで最上位の賞をもらって、市長賞を受賞したと。そうしたら市長さんがこの子はいじめで自殺した子だ、と。それが被写体だ、と。これは問題になるんじゃないかということで、もう1回審査委員会をやり直して考え直してくれと。審査委員会も市長の圧力を感じて賞を取り消してしまったんです。そうしたらご遺族が怒って実名で写真を見せながら抗議しました。実はですね、スマホに遺書を書いていたんです、彼女。今年の8月25日に亡くなったのですけれども、あれは8月15日の写真です。真っ赤な傘をバックに、ニコッと笑っている。誰が見てもすごく輝いている瞬間でしょう。あの子が10日後に自殺してしまったんですよ。その自殺も、鉄道のホームから飛び込んで。彼女は生きたかったんです。僕は色々なケースを追いかけて、第三者調査委員会をしましたがみんな生きたいんです。死にたいと思って死んでいるんじゃない。生きたいと思っているんです。だから彼女は、最初に立ったホームに来た電車に飛び込めなかったんですよ。やり過ぎしてしまって。そうして陸橋を渡って、反対側のホームに行ったら今度は向こう側のホームから入ってきた電車に飛び込んだんです。そのギリギリまで悩んでいたんです。生きたいと思っていますし、そういう文面がスマホには残っています。それで16人がいじめたんですよ、凄まじいじめでしょう。学年が200人ぐらいしかいませんよ。その中で16人がいじめて。「あなたの顔を見ると目が腐る」とまで言われたんです。彼女は5月の段階でもう転校を決めました。僕が今言ってももう遅いのですが、彼女は転校していれば助かっていたと思います。ここでLINEが出てくるんですよ。転校先の手続きを取ろうとした時に、娘さんが「お父さん、やっぱり転校するのやめた。全部LINEでいじめられるから、転校先の中学校に変わってもLINEで繋がるからどこに行っても逃げようがないんだから。私、ここの学校でもうちょっと頑張ってみる」と。頑張ったらいけないんです、いじめは。頑張ってしまうと、ギリギリのところまで踏ん張って。そして手踊りの、日本三大手踊りと言われている、そこで小学校6年生のとき優勝しているんですよ

あの子。プロみたいにうまいんですよ。学校の外に居場所をちゃんと持っています。輝ける場所を。その子でも亡くなってしまいました。そこで彼女は頑張っ、頑張っぬいて、8月15日の手踊りの大会ではこんなに輝いていました。だけど24日に始業式です。北のほうだから、早いんですよ始業式が。9月1日ではなくて、24日に行ってみたらいじめがまた凄まじい。リアルに始まってきたわけですから。それで翌日の25日に亡くなったんです。「もう耐えられない、ストレスも限界だ」と。遺書にはいじめた子の名前を16人全員書いていました。なんと昨日、青森県警はですね、16人のうちの6人を児童相談所に通告しました。いじめとして。侮辱罪と名誉棄損罪の2つで。暴行罪でもなんでもなくて。侮辱罪と名誉棄損罪で警察が告発したというのは日本で初めてです。これは本来であれば学校や教育委員会レベルで動いて、加害者を指導しなきゃいけないのに何もしていなかったんですよ。見かねた警察が動いたんです。僕は本当は学校が動けなかつ

たということが本当に残念だと思います。ただできなかったことで最後に警察が動いたことは評価したいと思いました。普通の市民社会で言えば名誉棄損罪なんです。本当は中学・高校では法教育をしなければいけないんです。「これ外でしたら禁錮何年だよ」とか。そのようなこともきちんと教えて、自覚をもっている中学生・高校生にしくちやいけないんです。というので、いじめ問題は加害者指導も大切です。被害者を救済する、寄り添うというのは誰にでもできますが、加害者がいじめをやめて、「ごめん」と言って心から謝罪する。あるいは詫言なくても、いじめをやめるだけでも被害者は救われるんです。また文科省も動いていますが、風通しとして現場や市民の人たちも動いてほしいと思います。とにかく聴くということを大事にしてください。親子関係、友達関係、話すことが得意な人はたくさんいますが、聴くことが得意なことはもっと大事です。どうも長い時間、ありがとうございました。

シンポジウムを終えて

以下は、このシンポジウムに参加した方々からの感想である。

(当日配布アンケートより)

- 多くの気づきがあり、参加してよかったと思います。この講演に参加されている方たちは尾木先生の意見に賛同している方が多いと思います。今回参加されなかった人や今後会う方には、私が納得した意見を伝えていきたいと思っています。
- 教育の問題は本当に多種多様で、教師は解決のために日々忙しいのだと、今日のお話を聞いて感じました。これから若い私たちが、教師として学校を良くし、教育の世界を担っていけるように、この集まりのような教師として大先輩である方々のお話を取り入れることはとても重要だと考えます。
- 教員を目指しているものの、まだ漠然とした理解しか持っていなかったもので、尾木先生の話聞いて現場の現状、課題など、沢山のことを幅広く知れて良かったです。また、この機会に目標が明確になったので、今後しっかりと勉強して教員になります。
- 部活指導や不登校、体罰、SNSによるいじめ問題など、どのお話も非常に興味深く聞かせていただきました。尾木先生がおっしゃっていたことで一番印象に残ったことは、子どもも大人も共通して「心を通わせることの大切さ」です。1人1人に向き合い、相手にどう寄り添ったら問題を解決できるのか考えていきたいと思っています。社会科の教員を目指しているのですが、まずは1人の人間として本日のお話を胸に成長していけたらと思います。
- 教育現場のリアルな実態をふまえたうえで、現状をどうみるのか、どう解決するのかを、子どもの視点、生徒の視点にたって語られていて、教職をとっている学生の視点も含めて非常に厚みのある会になったと思います。尾木先生のお話も、学生の視点からの質問がふまえられたうえで現実を切り結んでいたことが印象深かったです。大変な時代ですが、若い人たちと一緒にいまの生徒と向き合いたいと思いました。